論文要旨

# 京都の近代化への布石

## —琵琶湖疏水の果たした役割の考察—

山田裕貴(経済学部 3 年)

指導教員：伊藤行雄先生

## 要旨

今日の都市としての京都をイメージする際、真っ先に思い浮かぶのは多彩な社寺仏閣を擁した古都という観光地としてのイメージだろう。しかし京都という都市は観光都市の色彩が強く先行するものの、それだけで都市を成立させてきたわけではない。

明治維新以前、京都は古都平安京の時代より続く天皇の住まう都として我が国日本の中心としての役割を担ってきた。しかし禁門の変による市街地の焼失や東京奠都によって天皇が住まいを東京に移したことにより、京都は日本の中心地としての地位を失ってしまう。これにより京都の街は産業の衰退や人口の減少といった大きな打撃を受け、非常に厳しい状況の中で明治の世を迎えた。

明治に入ると京都府は莫大な額を投資して琵琶湖のある大津から京都市内に水を引いて運輸や灌漑用水に用いるために琵琶湖疏水の建設に着手する。京都の産業に資することを目的として計画されたそれだが、はじめは目的である産業への寄与は必ずしも十分に達成されなかった。しかし目的を達成できなかったことに呼応して、当時我が国に入ってきたばかりの水力発電に着目し、いち早く疏水の流れを用いた電力事業に着手することで、京都市内に日本初となる電車を走らせる等、京都市の社会基盤形成の布石となったことを指摘した。

一方で京都市内では、水道の整備や道路拡張事業をはじめとする都市基盤整備が進められた。そしてそれらの呼び水として上水道用水の供給や疏水の流れを利用した水力発電による電力供給源として琵琶湖疏水が機能した。またこういった都市基盤整備を背景に平安遷都千百年紀念祭や第四回内国工業博覧会をはじめとする祭事を積極的におこなうことで京都市は“歴史観光都市京都”というイメージを国の内外に定着させ、近代化の進むべき方向を定めていった。

以上のことから京都の産業に資することを目的として建造された琵琶湖疏水はその役割に対する貢献は大きいものではなかったものの、結果として京都の都市基盤の礎を作る呼び水となり、本稿では、上述した諸祭事と車の両輪のようにそれを基にして京都は歴史観光都市として発展を進めていった点を強調している。